

女性恐怖症の社畜が（精神的に）逝くストパン

KEY (ドM)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通り

とは恐れ入ったと言わせてみたかった。

目次

女性こわい	1
社畜とサーニヤ(てんす)	9
タイトルはない(芳佳ちゃんかわいい)	14
もっさんは一番乙女(名推理)	18
無邪気さとは狂気なり(ルツキーニかわいい)	23

女性こわい

女性恐怖症の男がもし、女だらけの世界に放り込まれたら。

あなたがもし、その男だったら。

一言だけ言っておこう。

誰か、助けてください。



拝啓、お袋様。

時が過ぎるのも早いもので、私があなたの元から自立してもう7年が経ちました。

今では私も立派な社畜です。（上司は鬼畜です。）

毎日朝の5時に起きては、23時に帰ってきて、ベッドに寝転がった瞬間爆睡するというごみのような生活です。

子供のころは、こんな労働という鎖にがんじがらめになるのが社会人などとは微塵も思っておりませんでした。

私の若くして、禿げあがったという父も、このような気持ちだったの

でしょうか。

最近では、毎日がワクワクでたまらないのか、胸の動悸が収まりません。

週に3回、会社の飲み会に参加しているだけだというのに一体何がいけないのか

皆目見当もつきません。

容姿が悪いからか周りの人たちからはどうも距離を置かれているような気がします。

ですが、私は元気です。

なぜなら、自殺する勇氣もないからです。

なので、あなたの息子が自殺して、あなたが迷惑をこうむるといったことも、

保険金が入ってくるということもないので安心してください。

病気に気を付けて、せいぜい長いきしてください。

かしこ

ps 女性こわい



「ひつでえ人生。」

目の前にいる、金髪のリーゼントのヤンキーが煙草をふかしてそういう。

その言葉に対して、私ははあ、と返すだけだった。

サラリーマン（奴隷）である証のスーツとネクタイをビツチリと決め、

灰色のソファアーに腰掛けながら、目の前の人物の話に耳を傾ける。

ぷはあ、とヤニ臭い息を吐き、悲哀に満ちた声で僕を諭してくる。

「あのな。お前がどんな人生を歩んできたかというのはよくわかった。」

「はい。」

私の方が、見た目からして年上だというのに、目の前の人物に対して

なぜか頭があがらないような気がして、縮こまる。

灰皿に煙草を押し付け、履歴書のような書類をもって、私の目をまっすぐ

見ながら言ってきた。

「に、してもこれはないわ。」

「ないですか。」

自分の人生を否定されたというのに、そんな言葉しか出てこなかった。

そんなものか、というのが率直な感想だった。

まあ、マイナスだらけの人生だったのだ。

これで、楽になれるというのなら万々歳だ。

と、思っていたが、彼が唐突に残酷な事実を述べ始める。

「お前、地獄にも、天国にも行けねーわ。」

一体どういうことなのか。

死ねば、死にさえすれば、もつとましな

生活になるのではなかったのか。

「罪も徳もない。何もなければどつちも行けない。．．．南無。」

拝啓、お袋様。

私は、死んでも地獄にすらいけない人間失格の様です。



女性恐怖症が発症し始めたのは、子供のころの女性からのいじめが原因だった。

一人の女子から嫌われれば、他の女子全員から嫌われ、

男子からも一緒になっていじめられるという状況。

小学生の頃に、たまたま女子を泣かせてしまい、たまたまいじめられるようになった

結果、服を着た女性恐怖症が出来上がった。

親に孫を抱かせてあげられないのは残念だったが、私はオスとしては

もう、不良品なのだな、と悟った。

死のうかとも思ったが、いざ、実行に移そうとなると、目の前がぐにやあ、と歪み、

吐き気がこみあげてきて、それどころじゃなくなり、結局失敗してしまうのだった。

で、それが治るわけもなく、女性との恋愛を経験できたわけもなく、魔法使い（○）のまま三十路を迎えた。

女性は怖い。それは変わらない。

……でも、一度くらい、女性と付き合ってみたかった。

それが、死ぬ前に思ったことだった。

「神様転生というものが今、お前のいた世界で流行っていたな？」

「ええ。」

神様転生。

トラック、チート、特典、ハーレム、といった要素がこんもり詰まった、

自分の欲望を叶えるために作られる小説のことだ。

「お前、それをさせてやるわ。」

へ？という間抜けが声から洩れる。

一体この人は何を言っているのだろうか？

いや、そもそも私はもう疲れたから何もせずに

ゆっくりとしたいのだが・・・。

現世でのハードワークに身も心も擦り切れ、
つまらない人間となった自分に、自分自身でも見切りを
つけていた。

だから、断るつもりだったが、次の彼の一言によって
私は転生せざるを得なくなった。

「お前の女性恐怖症、治せるぞ。」

「本当ですかっ」

思わず、ソファアールから立ち上がり、彼を見下ろして
興奮気味に尋ねてしまった。
どうどう、と私をいさめる彼。

「まあ、お前は転生する気はないんだろ？」

意地悪く、二や突きながらそういつてくるヤンキー。
心の底を見透かしてくるようなその笑みに、思わず
顔がひきつく。

「・・・でも。」

そうはいうものの、ぐずる心。
決心がつかずにいた。

そんな私にはー、とため息をついて若干あきれたような
声を出すヤンキー。

「いいから、行ってこい!!」

げしつとケツをローキックで蹴られ、
部屋の外から追い出される。

あわあわ、と手を動かし、上から落ちていく。

落下する先を見ると、一筋の光が

輝いている。

「行ってこい。バカ息子。」

そんな一言が聞こえた。

■

さて、神様転生もとい、ヤンキー転生を果たしたのだが、とてつもない事実が気が付いてしまった。

何ももらっていない。

そう、何もだ。

あるのは、前世で身についた社畜根性と、異常な猜疑心、いじめられないためにしていた卑屈な愛想笑いくらいか。

自分の体を見てみる。

前世から着ていた黒のスーツ、白いワイシャツと黒のネクタイ。靴はそこそこの革靴で、真っ黒のリーマンの靴下。

あたりを見回すと、どこかの街のようで、私と同じような服を着た人もいれば、もっとラフな格好をしている人もいた。

だが、私の前世と比べて明らかにおかしな点があった。

………なんで、軍服を着ている女性がこんなにいるのだろう。

ぶわっと冷や汗が体から湧き出た。

19XX年。

後に私は、何度もこの世界に来たことを何百回も後悔することになるとは知らずにいるのだった。

■
拝啓、お袋様。

時が過ぎるのも早いもので、私が神様転生なるものをしてからはや数十年が経ちました。

いまでは私ももう4×歳です。

最近、枕から父と同じ匂いがするようになってきました。これが加齢スメルというものでしょうか。

一つ見落としていたことがあったのですが、

一応、私にも特典なるものがあつたようです。

……「女性からの好感度が、めちやくちやあがりやすい」という能力が。

なぜ、イケメンが女性からモテても、あまり嬉しそうでなく、疲れたような顔をしていたのか、死ぬほどわかりました。

ちなみに女性恐怖症はなんとか治りました。

これも彼女たちのおかげです（白目）

最近をよく、女性同士のキャットファイトや、

暗闘、足の引つ張り合いを見ても、体が震えることはなくなりました。

人間、慣れると適応は早いものですね。

孫を抱かせてあげられなくってごめんなさい。

でも、あなたの息子は元気です。

だから、心配しないでください。

私もなんとか今起こっている修羅場を切り抜けて、生きて明日の陽を拝めるようにします。

女性に刺された古傷も、今では知り合いの若い女の子に治してもらって完治しました。

おっぱい狂いですが、とっても優しくて、とっても料理が上手い子です。

それでは。

ps 女性こわい

社畜とサーニヤ（てんす）

おはよう、こんにちは、こんばんは。

夢の中に出てきた神様に対してそう言うておく。

「よお。楽しんでるのか？」

ええ、そりやあもう。

死にそうなくらいには楽しんでますよ。

私がそう意趣返しすると、自慢のリーゼントを

揺らしておかしそうに笑い転げる神様。

くっそう。

ほんつとうにたちが悪い。

私が女性恐怖症だと知って、

こんな女の子ばかりいる世界に送り込みやがって。

口に出して言ったら何をされるかわからないので、

心の中で愚痴る。

いひ、いひと顔の筋肉をけいれんさせ、

過呼吸気味になるほど腹をかかえて笑っていた

ヤンキー神は眼尻にたまった涙を手でぬぐう。

そして真面目な顔つきになった。

「つつても、ブラック会社にいたころよりましだろ？」

また、毎日エクセルをぼちぼちするお仕事したいか？」

そういわれると前世の記憶が蘇ってきて、

吐き気がこみあげてきた。

終わらない仕事。

残業。

先に帰る仕事場の仲間たち。

一人取り残される私。

あ、やばい。
手が震えてきた。

最近はお酒を飲みすぎることもなくなくなってきたのに。

「ほら。おちつけ。ひっひーふー。」

私に子供を産めと申すか。

■

夢が覚め、現実の世界へと戻ってきてしまった。

共同部屋のベッドから降りて、周りで寝ている
同僚たちを起こさないようにそーつとドアを開け、
外に出る。

長い廊下を歩き、庭に出て、外に設置してある
テーブルと椅子に腰かけ、一息つく。

体は汗でべたついて、気持ちが悪いくらいほぐぬめっていた。

ああ、いやな夢だった……。

でも、そんな夢でも覚められたら困る。

だって……。

「ここにいたんだ。」

後ろからかけられた声に振り向く。

そこには、頭からケモノ耳を出し、嬉しそうな顔で私を見つめてく

る

一人の少女がいた。

顔立ちは優しそうで、髪は銀色のショートカット。

身長は140cmあるかどうかという大きさ。

振り返った態勢のまま固まり、苦笑いで応対する。

と、同時に周りに誰もいないか確認する。

他に女性がいたら大惨事だ。

特に、彼女と仲がいいあの子に見つかったらそれこそ……。

大丈夫、大丈夫。

いける、いける。

社畜として生きてきた経験（地獄）を思い出せ。

あの頃に比べたらこんなもの屁でもない。

何か言おうと口を開こうとしたら、彼女が歩み寄ってきて、

私の顔を間近で覗き込んできた。

じーっと見つめてくる彼女。

女性が怖い私にとって、

この状況は地獄以外の何物でもなかった。

……あ、あの？

「……………ん。」

ペロ、と首筋を突然舐められた。
突然の行為にびく、と体を震わせる。
一体何をしているのだろうか。

サ、サーニャ・・・？

「しよっぱい・・・。いやな夢でも見たの？」

汗の味で私が悪夢を見ていたことを見抜いた彼女に
今度は別の意味で恐怖する。
こわE。

エスパーか。

あ、ある意味エスパーだった。

しばらく首元を舐められていたが、
スッと彼女が私から離れる。

冷や汗が収まり、ほっとすると、
また急接近され、心臓が飛び跳ねる。

耳元でぼそりとささやかれた一言。

「・・・いつでも、見守っている、ね？」

私を選んでくれると信じてるけど、もしそうじゃなかったら・・・。
な、なかったら・・・？

その先を口にはせず、意味ありげに笑う彼女。
きつと、私でなければ惚れていたであろう
魅惑的な笑みを浮かべる。

これが、私の日常。

前世とは別の意味で地獄。

ハーレムと書いて地獄というのは、
大奥があつた時代から変わらないらしい。

神様。

助けてください。

あ、神様のせいでこんな状況になっているから無理なんだった。
ふあつく。

タイトルはない（芳佳ちゃんかわいい）

息も絶え絶えとなりながらも、

サーニヤがいたところから離脱することに
成功した。

が、さきほど彼女に舐められた首筋の湿り気具合に

心臓がきゆうううつと締め付けられるような不快感が体を包む。

もう、ゴールしてもいいのではないか。

ネクタイをロープ代わりにして自殺しようとした

あの時の気持ちが脳内によみがえり、ポケットに忍ばせていた
護身用のナイフでリストカットしそうになる。

が、すんでのところで踏みとどまり、
ナイフを落とす。

膝から崩れ落ち、体を震わせながら地面に両手をついた。

……う……ああ……。

嗚咽が漏れ、涙がこぼれそうになるのを必死にこらえる。

ちくしょう、ちくしょう、とシリアス気味に

振る舞っても、格好さえつかない。

そんな私の背中をさする誰かの手。

「だ、大丈夫ですか!？」

ぼうつとした意識で声のする方を振り向けば、

そこには、明らかにパンツ丸出しのような恰好をした、黒髪の少女がいた。

・・・芳佳・・・ちゃん？

にこり、と慈愛に満ちた彼女の笑みを見て安心したのか、意識はそこで途切れた。

■

「また気絶したのか。」

またかよ、と黒塗りの高級そうな革製のソファーにふんぞり返って足を組みながら茶色の葉巻をふかし、天井に向かって白い息をぷはあ、と吐き出す神様。

まただよ、と思いつつも彼の正面にあるぼろっついソファーに座り、やけくそ気味に置いてあったポテチをガツガツと食べる。

意識を失うか、寝るたびに彼に会うこととなる。

「今回、就寝以外で起きていられた時間は67分・・・。タイム伸びてるな。」

毎回気を失っては、ここに来ることもしばしば。

で、神様が私がどれくらいおきられていたかタイムを計って面白がるという図が毎回繰り広げられる。

あああああああ、と頭を抱えてソファーにふて寝する。

私がおんな風に発狂しているのにも理由がある。

それは……。

プツ、という何かの電源が付く音が聴こえ、
芳佳の声も聞こえてきた。

『ん……えへへ、へへ、へへへ……』

「良かったな。彼女にえらく愛されてるぞ。」
耳を両手でふさいで、聴かざるのポージングを取り
現実から目をそらす。

今、彼が見ているのはきつと、あの世界で気絶している
私がどうなっているかという状況だろう。

ふざけたことに、テレビに私の姿が映るといふのだ。

つまり……。

『ああ。すごいっ。こんなに近くで……っ。』

「おおー。すっげえ。外でそんなことすんのか。」
どんなことしてんの、と聴きそうになったが、
本当に狂いかねないから辞めておいた。
背中から聴こえる芳佳の艶っぽい声。

『……っ♡♡……っ♡♡』

「AVよりやべえ。」
神様がガチ引きトーンの声でそういったので
何が起きているのかもものすごく気になったが
現実逃避を決めこむ。

『いいよね・・・♡これもきつと神様がくれた褒美だよね・・・♡♡』
「そうだよ○」

勝手にそんなものをプレゼントするな。

心の中でそう思っていると、現実に戻らなければならぬ
一言を芳佳が言い始めた。

『・・・誰もいないところに引きずって・・・』

「さすが軍人なだけあって、人の運び方がうまいなー」

がぼつとソファァーから起き上がってテレビの画像を見れば、
そこには、恍惚とした笑みで私の体を引きずって、どこかに
向かう彼女の姿が。

「戻らなくたっていいのか？あのままだと、お前、”パパ”になるぞ。」

サーっと血の気が引いていった。

何とか意識を取り戻して帰ってきた私が目を開けると、
鼻と鼻がくっつくほど近くで私をたまらぬ笑みで見つめてくる
彼女の姿があった。

どうやら、戻っても、戻らなくても地獄だったらしい。

羨ましいでしょう（震え声）

もっさんは一番乙女（名推理）

白米が食べたい。

前世の日本食が無性に恋しくなった。

基地で働いていれば、食べるのに困らないが、かといっていつも満足できているわけでもない。

つまるところ、故郷（前世）の味に飢えていた。

味噌、醤油・・・

いずれもこの世界ではあまりお目に掛かれない代物ばかりだ。

芳佳に頼めば作ってくれるだろうが、

先ほど、逆レイ○されそうになり、逃げ出してきたばかりなのでその選択肢はなくなつた。

基地内での仕事が終わりに、外を散歩する。

夕飯は食べてが、洋食だったので満たされない。

腹は膨れても舌は満足していない。

共同部屋のベッドで、同期の仲間と一緒に寝ていたが、寝付けずにベッドを抜け出す。

廊下を音を立てないように忍び足で歩き、食堂まで向かう。

明らかな軍規違反。

ばれたらどうなることやら。

だが、それでも止められない。

目的の場所までやってきて、こっそりと昼間に開けておいた窓から侵入し、中に入る。

何か、日本食のようなものはないか。

もっさんか、芳佳あたりがもちこんでいるのではないか。

そう考え、厨房をあさるも見つからず、がさごそと手当たり次第に
捜し続けていると

後から首元に日本刀を当てられる。

「動くな」

ぴっ、と日本刀の切っ先で首が薄く切れ、
血が少し出る。

殺気を背中で感じながら両手をあげて降参する。

あ、やばいやばいやばい。

この声は……。

「……ほう。」

後からぴつとりと体をくつつけてくる人物。

この基地で日本刀を持っている人物など、
私の知る限り一人しか知らない。

「……ふ、ふふふ……。」

真つ暗闇の中、耳元で、もっさんという愛称で親しまれている、
坂本美緒の嬉しそうな声が聞こえた。



「で、またここに来たのか？」

背中から胸を押し付けられて、「あててんのよ」
をされるのは普通の男性なら嬉しいだろう。

だが、私は女性恐怖症の異常な男だ。

そんなことされたって、泡を吹いて倒れることしかできない。

「あの眼帯の女、すっげーにやつきながら気絶したお前を抱きかかえて
て

体を擦り付けてるけど。」

あー、あー、きこえない。

若干のデジヤヴを感じながらも、

耳を両手でふさぎ、目をぎゅつとつむって

何もわからないふりをする。

「まあ、お前がそれでいいならいいけどよ。」

つまらなそうにそういう神様。

とはいえ、向こうでも同じく時間が経つので

早く戻らないともっさんに何をされるかわからない。

床に四つん這いになって膝だちし、

頭を大きく振りかぶって床にへドバンする。

「いつ見ても受けるわ。」

げらげらと私が頭を床に自分からぶつけるところを
見て、笑う彼。

ぜったいころす。

通算、4932回目の殺意を抱きつつ、
痛みと共に現世に戻った。

◆
「ふへえ……。へへへへへ……。」

目を開けたらそこは地獄だった。
こつち側に帰ってきたと思ったら、ハイライトが消えた
目で、私をぎゅつと抱きしめるもっさんの姿が見えた。

出会ったときはクール系のキャリアウーマンだったのに、
一体どうしてこうなったのか。

げせぬ。

美緒みたいな美人に抱きしめられて、普通の男だったら喜ぶだろ
う。

しかし、私の場合は鳥肌を立てながら吐き気を催して、今にも倒れ
そうになるだけだった。

いつもは眼帯をして抑えている片目を、そつと眼帯を外して、
私に見せてくる美緒。

「な、なあ……。私の目、へんじやないか？」

実は、自分の片目にコンプレックスを少々感じていたという美緒。
それを告白されたときに、彼女が安心するようなことを言っ
てしまったばかりに、
こんな関係になってしまった。

また、気絶しそうになりつつも、額に脂汗を浮かべながら、
精一杯の苦笑いと共に言う。

きれいだよ（）

「ほ、本当か・・・？」

ぎゅううううつと正面から抱き着いてきながら
甘えてくる彼女。

色々な意味で心臓が止まりそうだった。

ほんとほんと（やばい、しにそう）

「うれしい・・・。」

顔を赤らめ、微笑えむ美緒。

心なしか息が荒い。

私ももう、過呼吸で息が乱れまくっていた。

私と同じように興奮していると勘違いしたのか、
目を閉じて顔を近づけてくる美緒。

逃れようにも、首の後ろに両手をまわされ、
身動きが取れないようにされているので逃げられない。

あ。やめて、やめて、やめて、やめ

そこで後頭部に衝撃を感じ、ぷつん、と意識は途切れた。

無邪気さとは狂気なり（ルツキーニかわいい）

今日はいい天気だ。

雲一つない快晴。

青々とした空模様。

鳥が羽ばたき、風が吹けば木の枝についている葉っぱが
さわさわとざわめく。

そんなに日に私は……。

『ねえ？どこ行ったのー？恥ずかしがらずにでてきてよー。』

『おかしいなあ。今日はアタシと一緒にスピードの向こう側にいく予定だったのに。』

絶賛、ウィッチたちから逃亡中だった。

感知能力のあるサーニヤが警戒任務に出かけていなかったらアウトだった。

今は、古びていて、長く使われていない基地内の倉庫部屋に体育座
りで震えながら
隠れている

『全く、目を離すとすぐにどこか行ってしまふんですから……。』
『やっぱり足の筋をナイフで切って、歩けないようにしたほうがいい
と思う。』

『リネットちゃんもうそう思う？車いすに乗つけてあげれば
歩けなくなっても外には出せてあげられるし……。それもいいか
も。』

こんな会話が近くを通り過ぎていくウィッチたちから聴こえてくるのだ。

カツ、カツ、と足音が自分の近くから聴こえてくるだけで
心臓が締め付けられたような圧迫感を体中に感じる。

なぜ、私がこんな目に、と思いつつ、心の中で神様にふあつくと中
指を立て、

これからどうした方がいいのかを必死に考える。

案その①

ここから出て、もつと安全そうな場所に移動する。

『あ。ミツケタ。』

『全く、ドコイツテイタノサ……。』

『ちよつと運動しましょう。ええ、ヨルノホウノ……。』

すぐに見つかつて、大変なことになる可能性が高いから却下。

案その②

ここですつと籠城する。

何の解決にもならないことを知りながらも、結局現状を先延ばしに
するのだった。

だが、久しぶりの一人の時間はとても安らぐものだった。

ベッドで寝ていて、気が付いたら隣にウィッチが添い寝していて、
発狂する、なんてことがなくて済むとは。

それだけでも素晴らしい価値がある。

近くの段ボールにしまつてあつた毛布を取り出し、
体をくるみ、目を閉じる。

いつも気絶して寝ていて、まともに眠れていなかったからか、
とてつもなく眠かつた。

あ、これやばい。寝てしまう。
そう思い、意識を手放して寝ようとする、何かの気配を感じた。

「おきろー！ー！！」

目の前で突然叫ばれ、体がびくうつと反応した。

何だ、一体何が起きた、と頭が混乱する。

耳がグワングワン鳴っていて、痛い。

めまいを感じながらも、目を開けて、状況を確認めると
目の前に、見慣れた顔があった。

「起きた！まったく、今日は私と遊ぶ約束だったでしょー？」

ツインテールの、小さなウィッチ。

フランチェスカ・ルツキーニが八重歯をむき出しにした笑みを浮かべて、

そういつてきた。

このあと、めちやくちや絶叫した。



紆余曲折あって、なんとか落ち着いた私は、彼女の「私と一緒に遊んでくれたら、みんなにはこの場所を秘密にしてあげる。」という取引に従い、ルツキーニの機嫌取りをすることになった。

なったのだが……。

「っん。」

なんだかとおつても機嫌が悪そうに見える。

私があぐらをかいているところに飛び乗ってきて、同じ毛布にくるまり、

背中を預けてきている彼女。

しかし、拗ねている。

あ、あー……。ルツキーニ？

私がそういつても、ぷい、とそっぽを向くだけで返事をしない。

今までもこうしたことはあつたが、最近はなかつたはずだ。

何が原因なんだ。

頭を抱えそうになったその時、ルツキーニがぽつりと漏らした一言がはつきりと聞こえた。

「…寂しくなったら、いつでも一緒にいてくれるって言ってくせに。」

頬を膨らませて、むーつとうなる彼女。

シャーリーに甘えて、ホームシックに耐えていた彼女は、父性に飢えていた。

そこで、女性に好かれやすいという能力を持った私と出会ってしまつた

彼女は、私について回るようになった。

おんぶ、だっこ、添い寝。

あらゆることねだられた。

女性恐怖症ではあつたが、ルツキーニはまだ子供だったため、特に鳥肌がたつようなこともないし、普通に接せるだけに、

色々と優しくした。

それまでに出会ったウィッチたちが肉食過ぎたということもあつたのだろうか、

無邪気で、裏がないルツキーニには精神的に大分助けられた。

いくなれば、この世界に唯一存在するオアシスのようなものか。

ルツキーニの頭に手をポンとのせ、頭をがしがしと乱暴になでる。

わるかったよ。．．．いまは、一緒に過ごせるだろうか？

「今だけじゃなくって、これからも！」

それは、ルツキーニの身が危ないとは言えなかった。

他のウィッチたちの暗闘に巻き込まれる可能性がある、などと、目の前の少女に

いうことはどうしてもできない。

だが、この癒しを手放したくもない。

もやもやとした気持ちが胸を占めはじめ、胃がむかむかする。

「?どづし．．．」

彼女の声を聴きながら、意識が途切れていった。



どういうことなの（おこ）

「精神的な葛藤によるストレスによって気絶した。で、ここに来た。」
わかりやすい説明をありがとう（血涙）

唯一の安らげる時間が終わってしまったことに怒りながらも、
床に体育座りしていじける。

彼女は、唯一病んでいないウィッチなのに……。

私がそうつぶやくと、神様が「……そうだな。」と返事をする。

早く彼女のもとに向かいたい。

目を覚ますために床に手をつけて、頭を思いっきり振りかぶってぶつけるも、体が痛みになれてしまったようで、気絶できない。

「恒常機能ってやつだな。体が慣れちゃったから、痛みでなかなか気を失うことができないんだ。」

四つん這いになって打ちひしがれる。

なんとということだ。

他のウィッチたちに襲われていて、一刻も早く現世に戻らなければならぬ状況と違い、今はルツキーニのためにはやく戻りたいのに。

がつくりと肩を落とす。

「……まあいいんじゃない？あの子、なんだか言って気絶している」

お前のことを優しく介抱しているし。」

だったらなおさら目を覚ましたいんですけど……。

罪悪感に打ちひしがれながら、自然と目が覚めるのを待ち続けるのだった。

「子供扱いされるって、デメリットもあるけど、メリットも多いんだよねー。

こんな風に、いくら体をくつつけても拒否反応がでないみたいだし。

「……いやー。子供みたいな容姿でよかったよ。今は信用を失いたくないから、

何もしないけど……。……あなたがいつまでたっても、何もしようとしてくれないなら……。」

ソノトキハ、シカタナイヨネ